

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷十二号（通巻第二二八号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第228号

4. 2013

結綿

品川 鈴子

母校なる雀隠れに試歩逸る

春霖に惑ひて下車す母校駅

入船に市章ぼやける芽木の雨

かいつぶり地底プレートずれを知る



中央病院 手^て絡^{がら} 緩みし 段 雛
雛 段に 異人も 跼む 新病院
引越して 親王 雛の 鬢ほつれ
結綿のはみ出でし まま 妃 雛
採血に 雛の 黄ばみし 細面
暴風雨 雛納めるを 日延べせん



玉鈴

吟

兵庫 藤井久仁子

歌がるた得意札さへ取り零す
初春の父の謡の遠かりし
葉牡丹のクツション二つ門前に
初日の出とんがり屋根の狭間より
初御空木曾の天狗に拝礼す

兵庫 藤田かもめ

靴下の上に地球儀置くサンタ
睦まじく婚姻届書く聖夜
初富上を仰ぐ甲板豪華船
誤字脱字多き校正初仕事
大鵬の訃報ありけり寒卯

大阪 藤田京子

来る筈のなき名を探す年賀状
ごまめ食べせがむ嬰兒のおちよぼ口
孫・曾孫卒寿の手よりお年玉
今年又夫を支えて初詣
風花の町夫と乗る救急車

兵庫 史あかり

黒犬は爪まで黒し寒椿
戸締りは夫の役割除夜の鐘
休日の氷柱の長き郵便局
十日戎の賑はひ遠く小商ひ
魚屋の海鼠を掴む太き指

兵庫 古井公代

重箱に子等の檜めく祝箸
嫁が刈る頭揃ひしお正月
独り居に慣れてハミング初湯殿
一月の七日となりし服の染み
極月のまはる地球に犬を連れ

大阪 古林田鶴子

雪雲の現れクイズ解けぬ間に
葉を落し散歩うらみち明かるうし
黄色い声野太い声や寒御古
好物のみ二人暮しの節料理
寒椿の紅白垣根好好爺

兵庫 細川知子

新札のつり銭用意初商
白の中ぐうちよきばあと餅手水
春着の子マナテイに頬すりよせる
弾初の首に残りし楽器跡
歩数ほど前へ進めず春着の児

兵庫 細野恵久

陽光と流れも豊かごみ摘む
春眠の足の先よりむず痒し
里芋の芽が出て八分音符ほど
花の下赤子が赤子見てをりぬ
涅槃西風弥生人骨海を向き

愛媛 松井洋子

住宅ローンに倣ひ大振り注連飾
屋台並び手水舎隠す初社
読み初めは子より拝借「銀の匙」
外つ国の楽譜も届き初稽古
スペインの土産話もけんちん汁

埼玉 松木清川

百歳の誇りを秘めし賀状かな
首都圏は雪に弱さを曝けだし
打ち放しに人影もなく冬桜
老いし故今葉限りと賀状来る
筆を持つ手が億劫と賀状来る

東京 松本アイ

ポランティアも休み勤労感謝の日
冬空に槌音ひびき世代の交代
栗飯のケースの前に戻りけり
崖の端にオレンジ珠なる烏瓜
師走はや気分ばかりが前のめり

愛媛 松本恒子

湯豆腐の桶に見とれし京の旅
うたかたの吾れを見下す冬木立
話また昭和にもどる掘炬燵
手櫛して端に鎮座の初写真
女正月悪妻どもの溜り茶屋

兵庫 三枝邦光

病棟に届く売り声師走かな
来年の逢瀬指切り十二月
手袋の女園丁高梯子
鴨の声ほかに音なき余呉の湖
冬景や北上くだる一葉舟

兵庫 水野範子

寄せ鍋に閉ざせし心ほぐれたり
吟行のシヨール新らし老の派手
童歌始まり終わる新年会
干大根伊吹嵐に倒れ落つ
ヒューズ飛びスイッチ探る二日の夜

兵庫 水野 弘

春迎う読経する弟声涸らし
教え子の医師合格と春の朝
送られし林ごの行方思案中
爪切りや孫の引く手に娘汗
吹雪中沖へ船出の同期会

香川 三橋 早苗

古楽器の奏でるバツハ聖誕祭
似非信者なれど聖夜はチャペルへと
燭台とパンと葡萄酒聖夜餐
瞬く間梢咲かせる牡丹雪
「転んだ」と電話のかかる松の内

茨城 三輪 慶子

火打する烏帽子きりりと能始
たまさかに褒められてをり春隣
大鳴門渦平らかに春待てり
海苔簀の市松模様西淡路
雪女郎電車を止めて終ひけり

埼玉 向江 醇子

大熊手買手を囲む人だから
世辞もなき得難き友と冬の夜
老の春脳のリセット鉦押す
釣り好きの子の落着かぬ三が日
恋の歌聴きて出づれば冬の星

兵庫 村田とくみ

冬ゆやけベンチに竹刀と缶コーヒ
寒波急みな背をちぢめ小走りに
何も無き口のクリスマス齒科予約
美容院片道だけの冬帽子
年の暮惑ひ数分くじ売場

大阪 師岡 洋子

初弓の逸れたる一矢地に立てり
やはらかき一人の時間初湯殿
吹奏楽部思ひ思ひの初稽古
根深汁音なく山の暮れてきし
蛇口より湯の出で今朝の女正月

東京 安田とし子

ふるさとの味噌の香ほのと寒鰯焼く
小恙とて息災のうち日脚仲ぶ
子を呼びてときめき頒つ寒落暉
鍋の底焦がしてしまふ小正月
春待つや氣の儘といふ寂しさに

香川 横内かよこ

新しき肩書きで受く御慶かな
初旅や箱根走る子応援に
初凧の漁村に小さき古鳥居
年あらたまた探し物から始め
人の波真中で交はす年詞かな

大阪 吉田和子

菓食ひ鍋の木蓋の反りしまま
暖房のメトロ口左右は異邦人
図書館の本を十冊冬籠り
吊るさるる荒巻鮭のやぶにらみ
寒晴に杖つき傘寿一万歩

兵庫 明石文子

雪しまく奥の細道むすびの地
年男背すじ伸ばして現るる
初夢を思ひ出せずとひとりごと
女正月曾孫の写真見せられて
初場所や大鵬逝くのニュースとぶ

愛媛 足利鋤子

無理きかぬ吾が身知りゐて年用意
年始め又も葉に頼るのみ
遠距離の友と病ひの初電話
大厄を祓はぬうちに疫神来
死の旅の晴着をきめしそぞろ寒む

大阪 尼寄太一郎

元禄の過去帳を繰り霊迎へ
烏瓜の花戦ける線路脇
黄のポンチヨ燥げる梅雨の水溜り
大あぐら祖父の晩酌片裸
端溪の硯洗ひて父想ふ

兵庫 荒木治代

淑氣満つ使ひ古りたる筆筒にも
子午線を貫く鉄路寒の晴
追憶の黙が育てる囲炉裏の火
スキー靴脱ぎ狭めたる宿の土間
風花の地炉に暖とるなつば服

大阪 居内真澄

出せば答ふ出さねば軽き賀状束
針始スラックスにはゴム紐足し
絆文字炎に失せて震災忌
春宵に補聴器外し推敲す
コルセット結び直して春嵐

大阪 池田かよ

顔中の皺を集めて御慶かな
初詣フアイト太鼓に森ひびく
ぬけ道は止めて通さず初詣
七福のその一福へ土手伝ひ
賀状繰る日本一の句を探し

兵庫 池田久恵

薄紙を剥がす病状寒夕焼
窓開けば底冷の底入り来る
弁天池名を知りながめ初句会
年始め貧乏ぐせがもう出たり
初笑いへのへのもへじの泣き笑い

鈴の奏

品川鈴子選

獅子舞に頭差し出す店の客 兵庫 太田 健嗣

襲名の番付厚い初芝居
落とし物手袋一方虚空指す

兵庫 太田 健嗣

厄落し親が代わりに参りけり

春空へ紙の飛行機病室から 兵庫 長瀬 節子

買ひ初は二十歳の孫の髪飾り

寒の朝一步踏み出す願ひ坂

退職の夫と二人の七日粥 大阪 丹後みゆき

寒燈下靴音堅く女連れ

透析の大盤振舞新年会

過ぎし日を見つめ直して冬籠り

雪の道父の迎えにホットする

ひしほの香漂ふ小島破れ芭蕉 兵庫 北村 和代

太閤の城の残石紅葉谷

父逝きて機窓に潤む雪の富士

凍てつきし暁の星父逝きぬ

あの人も逝きし故郷花芒 大阪 小菅美代子

退職の花束抱え野分の日

朝顔の門をくぐりて訪なへる

畝立ての鍬にきちきちばった来る

障害の兄と笑うて葛湯飲み 兵庫 松村 晋

魚の棚海鼠眠るや客溢れ

初漁の喫水深く入港す

ぜんざいの二つの小餅京の昼

初鴉宮居の木立鎮もれり 兵庫 福島 悠紀

耳さとき犬白内障冬ざるる

裏木戸の鍵落す音冬の月

教会の讚美歌聞こゆ落葉道 エレベーター着脹れ女弾き出す 兵庫 増本 明子

「おやすみ」と別るる初湯道後にて

煤逃げの夫は縁側切抜きす

凍土の境内ふんばるハイヒール

枯園の靴ぬぎそろへ画室入る 兵庫 内藤 京子

大画室しじまに八曲屏風立つ

弓始め懸魚に届けと出番待ち

通し矢の騒めき聞かず風神像

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子評
四句〜十五句 片野光子 //

*選句は全て 品川鈴子

落とし物手袋 一方虚空指す

太田 健嗣

雪の道父の迎えにホットする

丹後みゆき

落し物の中では一番数の多いのが片手の形のまま持ち主を失った手袋かも知れない。ふと目に留まったのは虚空へ人差し指を立てた形の手袋。誕生佛の「天上天下 唯我独尊」のあどけない姿かと想う。または仏像などの印相ならば更に哲学的な世界が深くなる。

都会暮らしの作者が久々に故郷の丹後を訪れる。すると予想どおり一面の雪景色。そこへ慣れた足取りの人影が現れてだんだんと近づいてくる。父親の元気な姿に出迎えられて、雪道の不安も吹っ飛び、遠来の全身にどっと温かい血が溢れる。ホットがHOTに通じるかも：

春空へ紙の飛行機病室から

長瀬 節子

ひしほの香漂ふ小島破れ芭蕉

北村 和代

春の兆しと共に体調も快方へ向かう。病室でのつれづれに紙飛行機を折って暖かい日差し窓から広い空へと飛ばしてみた。うまく春の気流に乗り、思いのほか遠くまで羽を伸ばして漂い遊ぶ。それは快気の吾が姿と重なり目を細めるひととき。

「ひしほ」は「醤」味噌、醤油の原形である。小豆島には「醤の郷」があつて特産品の、醤油、佃煮を作る黒い屋根の工場が立ち並ぶ。醤の郷を散策した作者は、破れ芭蕉を見つけた。ひしほの香と共に、小島の古い町並の景が浮かんで来る。

畝立ての鋤にきちきちばつた来る 小菅美代子

畝立てをしていたら、きちきちばつたが飛んで来て鋤にとまった。農作物に被害を与える事もあるが、今は畝立てをしている時期だから安心。単調な農作業中突然現れた珍客も、優しい作者だから気を許して側に飛んで来たのだ。メルヘンチックで美しい田園風景が伝わって来る。

初漁の喫水深く入港す

松村 晋

初漁は大漁だったに違いない。喫水深くの表現で想像がつく。大漁旗を掲げ堂堂と入港して来た。港には出迎える人人の喚声があがる。初漁で得た初魚を恵比須神や漁の神、船霊に供える祝を「船起し」などと言う。この港ではどのような初漁祝い、大漁祝いが行われたのであろうか。スケールの大きな景が伝わって来る。

裏木戸の鍵落す音冬の月

福島 悠紀

思い掛けず帰りが遅くなってしまった。悴んだ手で急いで鍵を取り出そうとして落してしまった。空には寒寒とした冬の月が冴え渡っている。深深とした静けさの中にとぎ

澄まされた様に輝く月が際立って美しい。皓皓と輝く月が鍵を照らしている。鍵を落す音、冬の月、幻想的な一句。

煤逃げの夫は縁側切抜き

増本 明子

煤逃げの逃げた先を調べてみた。書店、喫茶店、映画館、寄席、銭湯、犬の散歩、公園、シーソー、妻の実家、それぞれユニークであるが、私が一番楽しめた逃げた先は、旅、ちよつとの間行方不明。殿方の願望か。ミステリアスだが、句の世界で遊ばれた句であろう。作者の夫君は縁側で切抜き、冬日さす縁側でのんびり至福の一時。

通し矢の騒めき聞かず風神像

内藤 京子

京都三十三間堂の通し矢は、江戸時代に盛んに行われた通し矢に肖るもので、全国から新成人、ベテラン弓道者が集まって来る。成人の日弓道を嗜む新成人参加者が、振袖、袴姿で矢を射る初春の風物詩で境内は大勢の人で賑わう。本堂にいらっしやる風神像は、境内の騒めきにも微動だにせず、いかめしいお顔で立っぺいらっしやる。(以下略)